# 空

2006年

*SORA* 16号

# 晴夜（16）―3

柴田佐知子

漁了へし蜑の放埒一位の実

落鯛になほ青々と沖があり

PDF= 俳誌の salon

潮焼けの氏子ばかりや秋祭

みあれ祭待つ海鳴りとなつてきし

灘かけて媛神つどふみあれ祭

媛神に海人のかしづくみあれ祭

早梅や指の先まで父老いぬ

荒業の径ごと山の凍りけり

PDF= 俳誌の salon

# 拍手

青山　悠

おそろしき色に暮れゆく曼珠沙華

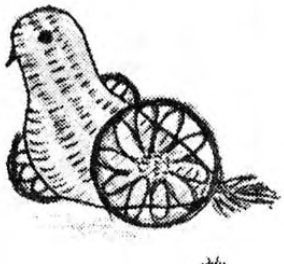
落日に飛び込みすずめ蛤に

大いなる石を神とし山粧ふ

豊年や海鳴りとどく古墳帯

地蔵堂多き浦町雁渡る

鳶舞うて御座船を待つみあれ祭



PDF= 俳誌の salon

灘風の揺らす献燈みあれ祭

柏手の灘へ出てゆく秋まつり

みあれ祭考古学者も来てゐたり

さきがげて救助艇来るみあれ祭

船渡御のはじまる狼煙上がりけり

みあれ祭ヘリコプターの旋回す

供奉船の二百海霧より現はるる

神郡の子と育てられ祭笛

# 首相

秋　千晴

出無精の夫がぶらりと爽気かな

青々と阿蘇の暮れたり菊膾

秋暑しセールスの電話ばかり鳴る

軸替へて風新しき九月かな

ほほゑんで痛み忘るる草の花

石段にとんぼとんぼの高さかな

赤い羽根つけて首相の誕生す

蓮の葉の一枚づつに顔がある

本殿の大きな構へ七五三

芋掘りのビニール袋いびつなる

踏ん張りて玄海祓ふみあれ祭

賽銭もとろ箱の中みあれ祭

天高く逆立ちの子の臍笑ふ

新調の紺の背広に赤い羽根

切り抜きの絵のごと桔梗開きたり

# 嘯

あさながぢ

細き首まつ直ぐ立てて冬の薔薇

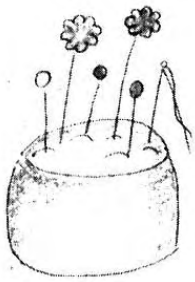
禅寺に幟はためく九州場所

死ねばすぐ忘れていいよ鰯雲

海人を呼ぶ声に染まりし珊瑚草

なでしこや可愛かつたと過去形に

日あたりて睫を上げし曼珠沙華



一つづつあきらめてゆく穴まどひ

自動ドア開いて二手の秋の道

ランタンに金魚大きく飛んでをり

その後の話聞きたき雪女郎

譲りあひ席の決まらぬ年忘れ

盛り塩のとがりて冬の灯がともる

一言で済ます応へや寒椿

羊飼ひとなりて出て来し生誕祭

凍てし石段尽きてマリアに迎へらる

PDF= 俳誌の salon

# 焚火

小林朱夏

鏡餅撫でて廻して重ねけり

幸せを振り返り見る雪女

焚火して厄を落とした顔になる

百人の太公望の息白し

松手入れ手元やさしく進みたる

望の月酔つては笑ひ遅れけり

紅葉山首の限りを回し見る

秋刀魚食ぶる男の口も尖りけり

水浴びて生き返りたる菊人形

唐津くんち

曳き山の鯛の黒目もくんちかな

日のあたる寒菊匂ひはじめけり

寒鯉の重なりて餌に寄り来たる

眠る児はいつも万歳福寿草

神木の傾ぐ沖より初日出づ

終電車去年と今年を跨ぎけり